

令和3年度

総合型選抜

(小論文選択)

小論文課題

海洋建築工学科

### 注意事項

- ① 課題解答時間は60分です。
- ② 「小論文課題」は1冊(表紙を除いて見開き2ページ)です。
- ③ 「解答用」原稿用紙は2枚です。受験番号と氏名は2枚ともに記入してください。
- ④ 「下書き用」原稿用紙が1枚(4ページ)あります。メモ等、自由に使って下さい。
- ⑤ 解答には「解答用」を用い、横書きで記述してください。用紙右下にページ番号が予め振られているので、順番を間違えないで下さい。
- ⑥ この用紙「小論文課題」と「解答用」原稿用紙は試験終了後に回収します。
- ⑦ 自分や父母の氏名、高校名、受験生を特定できる言葉の使用は避けてください。

## ■小論文課題

次ページにある文章を読んで、

「海洋建築工学科でどのように学修すべきか」

をテーマにあなたの考えを下記の条件を満足させながら、600文字以内で小論文形式で論述しなさい。(タイトルの文字数を除く)

- 1) 自身の小論文に適切なタイトルをつける。「解答用」原稿用紙の1枚目1行目の四角枠内に20文字以内でそのタイトルを書くこと
- 2) 本文を「解答用」原稿用紙の2行目から600文字以内で書くこと(2枚目の最終行までで600文字です)
- 3) 海洋建築工学科で学びたい理由にふれながら、本テーマと関連付けること

### 「建築の幅広さ」

建築という学問あるいは工学分野が取り扱うべきテリトリーは極めて大きいと考えている。ヨーロッパの大学の建築学科教育についての知見を得てからは、日本における建築の幅広さをなおさらに感じている。ヨーロッパの建築学の基本スタイルは芸術としての“アート”であり、そこでは工学的要素は薄い。日本での建築教育では美術系大学は別として材料や構造工学が当然ながら含まれる。ヨーロッパでの構造工学は基本的にシビルエンジニアリング<sup>※1</sup>分野であり日本でいう土木工学科で勉強することになる。

新たなウォーターフロントの地域開発を提案したり、巨大な海上都市を浮体工法で提案したりすることを想像してみる。建築が建物単体を造る視点しかもっていなければ、ウォーターフロントの地域としての計画を考慮しながら個々の建物の提案はできない。そして、浮体式海上都市は“街が浮いている”ものであるから建物単体ではなくインフラ<sup>※2</sup>も含めた都市である。このことから、ウォーターフロント利用の新規提案をするためには、単体としての建築物をデザインする思考やセンスと合わせて、その地域特性や広い空間をデザインするための知識も必要になることは明らかである。さらに、海上都市ともなれば、陸とは異なる海の特性和土木工学的なインフラ計画から機械・電気装置に関する幅広い知識なども必要になるともいえる。そしてこれらの提案を行う際に他の工学分野とは大きく異なるのが社会科学的視点である。日本ではいわゆる文系科目に位置付けられる知識である。元々はアートが大きな意味をもつ建築には、日本では工学的知識が強く要求された。そして今後の建築人材や海洋建築人材にはシビルエンジニアリングの視点も求められるということが、前述のウォーターフロント計画や海上都市計画の提案の例から推察できる。それらを計画・デザインして提案するためには社会制度、法制度、経済活動と人間活動そのものが考慮される必要がある。そのため、それらの知識や知見が強く求められるのである。

海洋建築という分野は、陸上のみをテリトリーとする建築に留まらず、建築工学が対象とすべき空間を海にまで広げたものである。そこで必要とされる知識の幅広さと深さをどのように修得していき、それを社会でどのように実践していくかを考えることは極めて興味深い。

※1 「シビルエンジニアリング」：日本語では土木工学、海外では巨大建築を扱うのもシビルエンジニアリングに含まれる。ここでは広く建設工学、環境工学を含むエンジニアリングである海外での意味合いで使用した。

※2 「インフラ」：インフラストラクチャーのことであり、ここでは公共交通や電力などの公共施設・設備等都市機能を支える構造物・設備全体を指している。